楽観的帰属様式と自己の 性格特性評価との関連

沢宮容子*

Relationship between Optimistic Attributional Style and Evaluation of Own Personality Trait

Yoko SAWAMIYA*

The objective of this study was to identify how individuals with an optimistic attributional style, that is, highly optimistic individuals, evaluate their own personality traits. For this purpose, a survey was conducted on 537 university students. The results of the survey revealed that individuals with an optimistic attributional style perceive their own personality traits with a bias toward the positive aspects. It was also revealed that the cause of this positively biased perception by individuals with an optimistic attributional style is that they are evaluating their own personality traits too positively.

key words: optimistic attributional style, optimism, personality traits

目 的

楽観的帰属様式をもつ者、すなわち楽観性の高い者は自己の性格特性をどう評価しているのだろうか。自己認知と抑うつ傾向との関連性は Alloy (1988) が明らかにしており、楽観的な人間が自己の性格をポジティブに評価しているだろうとは予測できる。しかし、楽観的な人間による自己評価が、自己の性格特性をポジティブに評価し過ぎる結果なのか、ネガティブに評価しない結果なのかという点については、明らかにされていない。Hirsch & Conner (2006)は、楽観性を高めることで自殺傾向が軽減される可能性について示唆している。このような知見を発展させる意味からも、楽観的な人間の性格特性のとらえ方について詳細に検討することには、意義があると考えられる。本研究では、楽観的帰属様式をもつ者が自己の性格特性をどのように評価しているかを明らかにする。

方 法

調査対象: 大学生 537 名 (男性 277 名,女性 256 名,性 別不明 4 名)を対象とした。

質問紙: (a) 楽観的帰属様式尺度 (沢宮・田上, 1997) (以下, 楽観性尺度と略記): Seligman (1991) の作成した尺度を日本社会の実状に合うよう改変し, 信頼性と妥当性を検討した二者択一式の尺度である。①「電車に乗り遅れてしまった」など負の出来事における永続性次元と全体性次元の和を示す「負ー(永続性+全体性)尺度」(6項目),②「自転車が盗まれた」など負の出来事における内在性次元である「負ー内在性尺度」(8項目),③「コンクールで入選した」など正の出来事における永続性次元と全体性次元

* 立正大学心理学部 Faculty of Psychology, Rissho University の和を示す「正一(永続性+全体性)尺度」(9項目)の3下位尺度で構成される。①,②は尺度得点が低いほど、③ は高いほど楽観的な帰属様式をもつことを意味する。(b)自己関連度評定に用いる特性語のリスト:森(1982)のポジティブ表現(以下、ポジ表現と略記)の特性語に、意味が類似で望ましさの低いネガティブ表現(以下、ネガ表現と略記)の特性語を対に加え作成された桑原(1986)の特性語リスト(60対120語)から、坂本(1994)が利用した46対92語を用いた。評定は6件法(「全然当てはまらない」~「非常に当てはまる」)によった。

手続き: 倫理的な配慮のもと, 調査の同意を得られた学生を対象に, 質問紙法による調査を実施した。

結果と考察

サンプルの上・下位 1/3 を各々楽観群・悲観群と定義し た。有意な性差は認められなかった。坂本 (1994) の分析 方法に倣い、まずポジ表現(45語)に対し因子分析を行っ た。主因子法(共通性の推定値はSMC)により固有値1 以上の5因子(P因子と表記)を抽出,プロマックス回転 を施し、負荷量が。40未満の項目を削除した。第1因子 には反対の意味をもつ特性語も抽出されたが、本研究で問 題とするのは同一特性を表すポジ表現・ネガ表現にどの程 度当てはまるかの評定であるため、因子負荷が正の6語を 第1aP因子(社交性・陽気さ), 負の4語を第1bP因子 (もの静か) としてまとめた。次に、ポジ表現の対になる ネガ表現を因子ごとにまとめ、P因子に対応した6因子 (N因子と表記)を別に抽出した(Table 1, 2)。つづいて, 各特性語の標準化得点を単純平均し, 因子ごとに合成得点 を算出した。各特性語は男女別に標準化しており、各因子 の合成得点の平均値は 0 になる。P, N 因子の各々について 合成得点を求めたうえで、差得点 (P-N) を算出した。差 得点が正(負)の値で大きいほど、ポジティブ(ネガティ ブ)な認知をしていることになる。

6因子の差得点について、楽観性尺度の3下位尺度を独 立変数とする多変量分散分析を行った結果,「負一(永続性 +全体性)尺度」(F(6,306)=14.59, p<.001)と、「正一(永続 性+全体性)尺度」(F(6, 240)=7.50, p<.001) の 2 下位尺度 で、楽観群は悲観群に比べ、自己の性格特性に対しよりポ ジティブな面に偏った認知をしていた。つづいて、差得点 について t 検定を行った結果, 2 下位尺度を独立変数とし た場合, いずれもほとんどの因子について, 楽観群は自己 の性格特性に対してよりポジティブな面に偏った認知をし ていた (Table 1, 2)。平均値 0 との比較において,「負一(永 続性+全体性)尺度」の高低により比較した場合, 悲観群 は5因子でネガティブ,楽観群は6因子でポジティブな偏 り (Table 1) を,「正一(永続性+全体性)尺度」の場合, 悲 観群は4因子でネガティブ,楽観群は5因子でポジティブ な偏り (Table 2) を示していた。すなわち、楽観性の高い 者は、ポジティブ、ネガティブの両側面を公平に認知して いるのではなく、ポジティブな面に偏った認知をしている ことが明らかになった。一方,楽観性の低い者は,ネガ ティブな認知に偏っていた。

上記の結果が、ポジ表現とネガ表現のいずれに対する評定の違いによるのかを明らかにするために、P因子、N因子ごとに分析を行った。6つのP因子について、楽観性尺度の3下位尺度を独立変数とする多変量分散分析を行った

Table 1 楽観群(負ー(永続性+全体性))と悲観群の 特性語に対する自己関連度評定値の差

因子		悲観群	楽観群	t 值
P-N	1a	18***a)	.14****	-5.44***b)
	1b	14*	.20***	-4.45***
	2	19**	.13**	-4.30***
	3	15*	.13*	-3.05**
	4	29***	.24***	-7.86***
	5	23**	.23***	-4.72***
P la	社交性・陽気さ	15**	.05	-2.56*
1b	もの静か	.04	01	0.47
2	大胆・情熱	10	.04	-1.75
3	従順・のんびり	.13*	16*	3.14**
4	細心	22***	.14**	-4.50***
5	冷静・諦めのよい	06	.03	-1.32
N 1a	八方美人・騒がしさ	.03	09	1.85
1b	陰気な	.17**	21***	4.77***
2	向こう見ず・激しやすさ	.09	10*	2.72**
3	追従・怠慢	.27***	29***	8.21***
4	小心	.07	10*	2.59*
5	さめた・粘りのなさ	.17**	20***	4.98***

a) 0 との差の検定の結果 (片側検定, *p<.05, **p<.01, ***p<.001)

結果,「負-(永 続性+全体性)尺度」(F(6,306)=8.02, p<.001) と、「正一(永続性+全体性)尺度」(F(6, 240)=7.97、 p<.001) の2下位尺度で,楽観群は悲観群に比べ,ポジ表 現を自分に当てはまると評定していた。次に,6つのP因 子の各々について楽観群と悲観群とで t 検定を行ったうえ で、平均値0との有意差を検討した(Table 1, 2)。6つのN 因子について、楽観性尺度の3下位尺度を独立変数とする 多変量分散分析を行った結果、「負ー(永続性+全体性)尺 度」(F(6, 306)=12.49, p<.001) と, 「正一(永続性+全体性) 尺度」(F(6, 240)=7.48, p<.001) の 2 下位尺度で, 楽観群は 悲観群に比べ、ネガ表現を自分に当てはまりにくいと評定 していた。次に、6つのN因子の各々について楽観群と悲 観群とで t 検定を行ったうえで、平均値 0 との有意差を検 討した (Table 1, 2)。平均値 0 との比較を考えた場合。楽観 群は、ポジ表現の過大評価よりも、ネガ表現の過小評価に よって特徴づけられていた。また楽観群と悲観群の群間差 を考えると、ポジ表現よりもネガ表現に対して、より顕著 な自己関連度評定の違いが認められた。 すなわち、楽観性 の高い者がポジティブな面に偏った認知をしているのは. 自己の性格特性をネガティブに評価しないためではなく. ポジティブに評価し過ぎるためであることが明らかになっ た。一方,楽観性の低い者はその逆の傾向を示していた。 両者は、ポジ表現に対してより顕著な自己関連度評定の違 いが認められた。つまり、楽観性の高い者と低い者との認 知の違いは、ネガティブな側面において顕著であり、帰属 様式を変容する場合にも、ポジティブな側面はあまり変化 せず、ネガティブな側面が変化する可能性の高いことが明 らかとなった。楽観性の高い者がポジティブな面に偏った 認知をしているのは、自己の性格特性をポジティブに評価 し過ぎるためであるという結果は、ポジティブイリュー ジョンが精神的健康につながるという研究 (e.g., Taylor & Brown, 1988) とも重なり、妥当な結果であると考えられる。

 Table 2
 楽観群(正一(永続性+全体性)) と悲観群の

 特性語に対する自己関連度評定値の差

因子		悲観群	楽観群	t 値
P-N	1a	18**a)	.15***	-4.64***b)
	1b	06	.00	-0.73
	2	21***	.19***	-4.92***
	3	15	.14*	-2.81**
	4	25***	.16**	-4.71***
	5	26**	.22**	-4.24***
P 1a	社交性・陽気さ	28***	.23***	-6.01***
1b	もの静か	.16*	25***	4.30***
2	大胆・情熱	18**	.12	-3.44***
3	従順・のんびり	.04	01	0.53
4	細心	15	.05	-2.18*
5	冷静・諦めのよい	03	.06	-0.99
N la	八方美人・騒がしさ	10	.08	-2.40*
1b	陰気な	.22**	25***	5.34***
2	向こう見ず・激しやすさ	.03	07	1.22
3	追従・怠慢	.19**	15***	4.21***
4	小心	.10	10*	2.68**
5	さめた・粘りのなさ	.23**	16**	4.50***

a) 0との差の検定の結果 (片側検定, *p<.05, **p<.01, ***p<.001)

一方、ポジティブイリュージョンは、短期間においては利益をもたらすが、長期間においては不利益をもたらすという指摘(外山、2006)もあることから、今後さらに詳細な検討が必要であろう。内在性次元はその他の次元と異なる結果となったが、これまでも異なる位置づけがされており(e.g., Abramson et al., 1989)、妥当な結果だと考えられる。

引用文献

Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Alloy, L. B. 1989 Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. *Psychological Review*, 96, 358–372.

Alloy, L. Y. (Ed.) 1988 Cognitive processes in depression. New York: Guilford Press.

Hirsch, J. K. & Conner, K. R. 2006 Dispositional and explanatory style optimism as potential moderators of the relationship between hopelessness and suicidal ideation. Suicide & Life-Threatening Behavior, 36, 661–669.

桑原知子 1986 人格の二面性測定の試み 教育心理学研 究, 34, 31-38.

森 知子 1982 質問紙法による人格の二面性測定の試み 心理学研究, 54,182-188.

坂本真士 1994 抑鬱者の性格特性の自己評価におけるネガ ティビティ・バイアス 心理学研究, **65**, 156-161.

沢宮容子・田上不二夫 1997 楽観的帰属様式尺度の作成 教育心理学研究, 45, 355-362.

Seligman, M. E. P. 1991 Learned optimism. New York: A. A. Knopf.

Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychologi*cal Bulletin, 103, 193–210.

外山美樹 2006 ポジティブイリュージョンの功罪 教育心 理学研究, 54,361-370.

(受稿: 2012.2.21; 受理 2012.6.8)

^{b)} 2 群間の t 検定の結果 (*p<.05, **p<.01, ***p<.001)

^{b)} 2 群間の t 検定の結果 (*p<.05, **p<.01, ***p<.001)